

# 1日目：人と場所に出会う日、自分をふりかえる日



## 開講式／オリエンテーション

素晴らしい晴天に恵まれたNEC森の人づくり講座の当日。開講式は会場であるハリスホールの研修室で行う予定だったが、急遽ハリスホールの前庭に椅子をセッティング。北は北海道から南は宮崎まで、全国から二十名の参加者が集い、小春日和の中での幕開けとなった。



## お互いを知り合う時間

輪になって座り、自分の出身地の「お国自慢」を書いて発表しよう。「シカが自慢って事は、出身は奈良?」「当たり前です」緊張の面持ちも解けはじめ、笑顔が生まれる。全国各地から集まった仲間だけあって、誰もが知っている有名なものから、「ええ?意外!」というものまで、地域性豊かなお国自慢でウォーミングアップ。その後は、草原へ移動し「秋の運動会」で心と身体をほぐした。



## 実習：自分史・自然史

自分がこれまで自然とどのように関わってきたかを、「幼年時代」や「小学生時代」などに分けてワークシートに記入した。子供の頃にしていた遊びや、環境に興味を持つようになったきっかけ、影響を受けた人や事柄、環境教育との出会いなどを思い起こして書く事で、自分がこの講座に参加するに至るまでの経緯をふりかえった。

(自分史・自然史／オリジナル：古瀬浩史 ㈱自然教育研究センター)



## 講義：環境教育、伝える仕事とその役割

この時間では、まず「お互いを知り合う時間」や「秋の運動会」が「アイスブレイク」と呼ばれ、この後の研修の効果をより高めるために参加者同士の緊張をほぐす時間であったというタネ明かしをした。そしてこの講座を進めて行く上での基礎を築くため、環境教育の歴史や基本的な考え方などの概論的な講義を行った。

「最初から頭で理解しようとするよりも、まずは先に体験をしてその後に講義を受ける方がより理解が深まる」という観点から、この後も基本的にこの形式をとった。



## 実習：一人一分プレゼンテーション

それぞれが持ち寄った「自己紹介グッズ」を使って、一人一分間という時間制限付きでの自己紹介。この時間は人に伝える実習である事、一分間が経つ前に話し終わってしまっても、聞く方は時間が終了するまで黙って待つ事などの説明のあと、スタートした。

写真やノート、ツナギ服や英語…それぞれの持ち味を活かした自己紹介が続くが、時間内に話し終わらず全部伝えられなかったり、逆に時間前に話し終わってしまい慌ててアドリブで繋いだり、思うようにまとめられなかったりと、人に伝える事の難しさも感じる実習となった。

## 2日目：自然を体験する日、環境教育を理解する日



### 体験：早朝ガイドウォーク

早朝の清里の森を楽しみながらのガイドウォーク。今の森の見どころや視点を変えてみる事の面白さなどがスタッフから伝えられる。森を抜けると広々とした草原が目の前に広がり、気持ちも広がる。



### 体験：道草ハイク

朝食後は再び外へ。たっぷり5時間をかけて自然の中を歩く「道草ハイク」。森の中の山道を登るコースと溪谷を降りていくコースの二つに分かれて出発した。綺麗な実を発見しては立ち止まり、疲れたら落ち葉のベッドで一休みするスタイルは、まさに道草。時間にとらわれずに思うがまま自然を楽しんだ。

途中でより深く自然と向き合うためのプログラムを幾つか行った。下の写真はその一つ、「森の万華鏡」という活動で参加者が作ったもの。二枚の鏡の中に自然物を自由に配置して作品を作り、タイトルをつける。このような活動を通して、新たな自然の見つめ方やより豊かな自然との関わり合い方を自分の中に取り入れた。



### 講義：インタープリテーションの理解

ここまでの体験をもとに、そもそもインタープリテーションとは何か？を学ぶ。インタープリテーションは「単に事物の紹介に留まらず、その背後にある意味を伝える活動」と定義される。インタープリテーションは人に伝える活動であるため、自然に対する理解だけではなく人に対する理解も必要不可欠である事や、インタープリテーションにはいくつかの形態がある事なども事例を交えて紹介した。



### 講義：社会学からみた環境教育

講師に若林千賀子さんを迎えたこの時間では、「あなたの思う男らしさ、女らしさって？」という身近な問いかけから、ジェンダー、人権問題、さらに貧困や人口問題など、環境問題と複雑に絡み合う諸問題についての講義をした。さらに環境教育とは「あらゆるエゴイズムへのチャレンジ教育」であり、わたしたちが目指すべき「持続可能な社会」の為の手段として環境教育がある事も。最後に「十年後に会いましょう」という若林さんからのメッセージ。

参加者からは「環境教育に対する視野が広がった」「最後のメッセージが心に残った」などの声があった。



### 3日目：伝え方を学ぶ日



#### 実習：伝える工夫&コミュニケーションワーク

一人一人が与えられた断片的な情報を持ち寄り、話し合う事で一つの形に仕上げるグループワーク。活発に発言が飛び交い、討論する中で一つのもが出来上がっていった。これからグループに分かれてプログラムを作るにあたり、考え方や思いの違うメンバーとどのようにコミュニケーションを取っていくのか、そのヒントを得るための実習を行った。



#### 実習：自然体験プログラムづくり

いよいよ自然体験プログラムをつくる段階へ。研修室でまずそれぞれの思いをじっくりと話し合うグループ、さっそく森の中へ出かけ、遊びながらアイデアを探っているグループなど、個性は様々。プログラムに参加体験する立場から、プログラムを企画実施する立場に変わる瞬間だった。

参加者に何を伝えたいのか？という「ねらい」の部分をまずはっきりとさせなければ、プログラムの内容を組み立てていくことは出来ない。またさらに、どうすれば伝える事ができるのか、参加者を惹き込むにはどうすれば良いのか…一つ一つの難題をじっくりと考え、意見を交換しながらプログラムづくりに挑戦していった。



#### なんでも相談所

プログラムづくりの時間中は、なんでも相談所を常に開設し、各グループから「ねらいが絞り込めない」「アイデアが煮詰まった」などの相談を受けた。

清里の自然を使って、あなたが伝えたい事を形にする…それが今回のテーマ。楽しかっただけで終わらない、「環境教育」としてのプログラムづくりに向けて、行きつ戻りつしながら進めた。相談所では参加者の考えや持っているものを引き出す事を大切に支援した。



#### インタープリターの部屋①

インタープリテーションにも様々なスタイルがある事を知ってもらおうと、「キープ自然学校」の田村さん、「キープやまねミュージアム」の湊館長を招いてのミニ講義。

田村さんはこの講座で皆が食べている食事を作っているスタッフ。出来るだけ地元の食材を使い、そのままの味を活かして調理する事で食の大切さを伝える、「食を通した環境教育」の話をした。湊館長は天然記念物ヤマネの研究の第一人者。研究室に閉じこもるのではなく、研究の成果を社会に還元していく活動には「スクラムを組む」事が必要である事を伝えた。

真剣に活動に取り組んでいる二人の姿は、参加者にとってもインタープリテーションの視野を広げる良い機会となったようだ。



## 4日目：プログラム実施・評価をする日①



### 実習：自然体験プログラム実施・相互評価

ついにプログラム実施の日を迎えた。どのグループも夜遅くまで話し合い、練り上げたプログラムを発表しよう。それぞれに苦心してきただけあり、斬新なアイデアで楽しい内容であるのは勿論、何よりも想いの伝わってくるプログラムが実施された。

一つのグループが実施し終わるごとに、体験者は「ねらいは伝わってきたか」「プログラムの流れはどうだったか」などの項目をフィードバック用紙に記入。実施者は自己評価を記入した。また、体験直後のホットな感想や改善点などを口頭でも率直にフィードバックしあった。お互いの成長のため、翌日の再実施につなげるため、体験者も実施者も熱心に話し合っていた。



### 講義：体験学習法の理解

体験学習法とは、「学び方を学ぶ学習」。プログラム実施での学びをさらに深いものにするために、体験だけで終わらせない事が重要である。まずはしっかりとふりかえり、改善点や発見をまとめ、次の体験につなげていく事がインタープリテーションには必要である。そしてそのためには、目に見えて起こる出来事や話される言葉だけではなく、参加者の心の中や関係性の中で起こる過程（プロセス）が非常に大切である事を、実習を通して学んだ。



### 講義：安全管理

プログラムを実施する上において指導者に欠かせない視点である安全管理に関する講義。野外で活動する中で起こりうる様々な危険に対する知識と心構えを伝えた。また、事故が起こる前に、何が危険かを察知するための危険予知トレーニングや、スタッフがガイドやプログラムを行う際に常に持ち歩いている救急用品セットの中身の紹介をした。



### 実習：自然体験プログラムの練り直し

体験者からももらったフィードバック用紙と自分達で記入した自己評価用紙を元に、自分達のプログラムを練り直した。実際に実施してみでの発見や反省点、感想などをふりかえり、どこを改善してどこを残すべきなのかを真剣に話し合う。方向性に迷った時には、自分達はそもそも参加者に何を伝えたいのか、という所まで立ち返りながら、熱のこもった討論が夜遅くまで続いた。

## 5日目：プログラム実施・評価をする日②、自分と向き合う日



### 実習：自然体験プログラムの再実施

一晩かけて練り直したプログラムをもう一度実施。どのグループも前日の体験とフィードバックを大いに活かし、改善してきた事が伺えるプログラムになっていた。

例えば二チームに分かれて自然物で音楽を奏で、互いに聴かせ合う「秋の森の音楽祭」というプログラムでは、聴く方は目を閉じているために「何の音を鳴らしていたのか知りたい」という前日の参加者からの反応を活かし、演奏の後お互いにどんな風に音を鳴らしていたか紹介し合う時間を取った。

自分達が改善した点、あえてそのまま残した点を参加者はどのように評価するのか、は実施する側にとって非常に関心がある事。一度だけの実施で終わらず、再び実施をする事によってより深い学びが生まれていった。実施後には、それぞれが持ち帰って次のステップに活かすために、再びフィードバックを行った。



### 自分と向き合う時間

三日間にわたるプログラム実習を終え、参加者の心の中に生まれているであろう数多くの事柄を整理してもらうための時間をとった。ずっと一緒に過ごしたグループのメンバーとも離れ、一人になって自分と向き合う時間とした。

基本的に自由時間にしたので、他にもお互いのプログラムを見せられなかったメンバーに披露したり、インタープリターの裏側を覗くバックヤード見学に参加したりと、それぞれの時間を過ごした。



### 自炊

六日間の講座も、一緒に夜を過ごすのは今夜が最後。皆で協力してシチュー、スモーク、焼きリンゴ、また参加者からの提案で笹茶を作った。ハリスホールの前庭では焚き火をおこし、それぞれ思い思いに過ごす参加者たち。中には夜明けまで語り合う参加者もいた。



### 自由参加プログラム：ナイトハイク

参加自由のオプションプログラムとして、夜の清里の自然の中でナイトハイクを行った。希望を聞いてみると全員が参加希望。一人で夜の森に寝転んでしばらく過ごすソロなどの活動をした。偶然シカに会ったりと、昼とは違った自然の姿を見る事が出来た。



## 6日目：日常につなぐために体験をふりかえる日



### 参加者からの嬉しいプレゼント

講座もついに最終日。朝食後に皆で記念撮影をした後、突然に「みんな、アレやるよ」という参加者からの声。そして次々とハリスホールの前庭に寝転ぶ参加者たち…。何が起っているのか分からずにキョトンとするスタッフ一同。しかしよく見ると、「THANKS!!」の人文字ができていた。そして一文字ずつ立ち上がり、スタッフ一人一人に感謝のメッセージを。聞けば、毎晩のプログラムづくりなどで忙しい時間を割いて準備してくれていたとの事。さらにこの後の時間でスタッフへの寄せ書きもプレゼントしてくれた。



### インタープリターの部屋②

今回の講座に関わっていたスタッフの一人は、実は第五回の本講座の修了生。大学三年生だった参加当時は環境教育は今よりずっと知名度が低かった事、講座に参加して多くの仲間に出会った事が今でも励みになっている事、現在キープでインタープリターとして活動する中で大切にしている事などを話し、新たな修了生たちにエールを送った。

### 一年後までにこれをやるぞ！宣言

講座の締めくくりは、一日目に行った自分史・自然史の続編「そして、これから」。全員で輪になって座り「一年後までにこれをやるぞ！宣言」をした。これまでの講座をふりかえり、また今の自分を見つめ直して、今後自分が環境教育とどう関わっていくか、それぞれなりの決意と想いを発表した。ここまで過ごして見えてきた皆の個性が活きた宣言に、時に笑い、涙し、拍手を送って応援しあった。この講座の終わりが新たなスタートである事を確かめる場となった。

### 閉講式

そして最後の時間。まず、六日間の皆の様子を撮りためた写真データをスライドショーにし、これまで過ごしてきた時間を一つ一つふりかえった。そしてスタッフから講座を通しての思いや、皆へのメッセージを伝えた。閉講式が終了して、見送り。全国へ頼もしい仲間が旅立って行った。現在では掲示板やメーリングリストが開設されている。

